

## 秋風の村

後銀作

銀作は戦時中、島根県益田市の種村に半年ほど住んだことがある。騒々しい都市に生きる銀作の心の奥底に永久に破られない静寂のように今もしんとある六才の頃のこの寒村は、いわば彼の原風景だったのだが一度も訪れないままに、気がつくとき、半世紀以上経過していたのだった。いや、つい最近まで種村が益田市にあるなどとは思っていなかった。

銀作の父親は徴兵に就く前の数年間を巡查として奉公することに、種村駐在所にやって来たのだった。銀作が父親、母親、妹と住んだ、小屋と書いていいほど小さなこの駐在所、それからその近辺の山や川は銀作の思い出の中で、秋風の中におかれていることが多かった。それは銀作が母親や妹と種村にやってきて父親と生活を始めたのが秋だったことにもよるのだろう。

秋が訪れ世の中が何となく静かになると毎年のように銀作の心は大気の汚染された喧騒の都会から昔の種村に戻って種村の子供になっていた。種村がもはや芳しいさわやかな空気に包まれずその小川が清らかでないなどは意地でも思いたくない銀作だった。幅二メートルばかりの川の岸に立ち辺りの草木がくつきり映じる澄み切った水の中を覗き込んでいた。放心状態で水と一緒に流れていくと、どうだろう、今も岸がふいに流れとは逆の方に舟みたいに進み始める。

川にはゆらゆらゆれる小さな木の橋がかかっていた。用心して渡らないと落っこちるよ。思い出の中で橋の下の川はいつも音を立えないでひっそりとあった。音を立って流れているように思っても、川にはただ沈黙と静寂があるばかりだった。静寂が立ち去った都会で精神の安定を脅かされながら生きていても、静寂は銀作の心の中でこのようにまどろみつづけていたのだ。

橋のわきは竹藪になっていた。銀作と同一年の、お父さんが床屋をやっている活発な女の子のスミちゃんや、スミちゃんの姉さんのヤエちゃん、銀作より一才年上の馬喰の息子、太郎ちゃんたちと橋の手前にやって来た時、誰かが踏んづけて飛ばした竹の切れっ端の鋭く尖ったのが銀作のふくら脛を貫いた。

スミちゃんはその時、どうしてあんなに素早く行動することができたのだろう。ありありと思い出す。黒目がちの彼女が大声をあげて叫んでいたのを、「銀ちゃん、じっとしてここいおりんさい。人にしらせてくるけえね。」といったのを、遠くの家に向かって駆けて行きヨードチンキの小さなびんを持って息を切らして戻ってきたのを。あのころ、薬といえばヨードチンキか、メンソレタムか風邪薬のトンぷくぐらいしかなかった。ヨードチンキが効いたのかふくら脛の傷はやがて癒えた。

あれから長い月日が過ぎた。しかしふくら脛の大きな傷跡は今もくつきり残る。傷跡をなでるたびに、あの時の小さな女の子の大きな親切を思い出す。当時は戦争中であり、子供たちは竹藪に入つて適当な竹を切つて、盛んに空気銃を作つた。銀作のふくら脛に飛んで来た竹の切れっ端もどこかの子供が棄てて行ったものではなかったか。ふくら脛の傷跡は銀作やスミちゃんが体験した戦争の傷跡といえるのかも知れない。

けがの後、しばらくしてスミちゃんが駐在所にやって来た。「撫子が咲いとるとこいってトリや人形を作ってみんさい。おもしろいよ。」とさそつてくれた。「せいなら、スミちゃんについて、そこいいくけえね」とびっこを引きながらあとについて行くと、野路のかたわらに薄桃色の花をつけた撫子が沢山風に吹かれていた。「トリと人形と、どっちを作つてほしいね」とスミちゃんが聞いたので、「トリ」というと、スミちゃんは真面目な顔をして一所懸命に作ってくれた。出来上がったのを見ると、それは何ともみごとなオンドリで、とさかと尾っぽは撫子の繊細な花輪で配われていた。このオンドリが自分のものだと思うと銀作はもううれしくてたまらなかった。早く手に渡してもらいたかった。

だが、そのとき銀作にはスミちゃんの気持ちが分かっていなかった。

たのだ。スミちゃんは作品が完成に近づくにつれて、だんだんそれを手離すのが惜しくなっていたのだ。自分の作品を手離したくない芸術家は、じつさい世の中に多いのだ。スミちゃんは自分でもこれほどみごとな撫子の作品を完成したことがなかったにちがいない。こんな凄くきれいなものが世の中にあっただとは。「ごめんね、こらえてね」といいながら、ついにスミちゃんがあっちへ走り出した。走り出したのだが、ずっと向うからこっちを見ていた。「銀ちゃん」とかいったようだった。銀作が駐在所の近くに帰るまで見ていた。びっこを引く銀作を心配してくれていたのだ。スミちゃんはそんな女の子だった。今でもどこかで黙ってそっとう見ている気がする。小さいスミちゃんのこのようなささいなしぐさからも思いつく。中の種村のうら寂しさ、静けさが生みだされている気がする。

銀作は撫子のオンドリが欲しくて、欲しくて、夜どうしても眠れなかった。とうとう親馬鹿の若い巡査は銀作を連れてスミちゃんが眠っている床屋に行つて何度も頭を下げをお願いしお詫びした。

「まことにすまんです、こらえちゃんさい」。寝ていたスミちゃんがかわいそうに床から眠そうな目をして起き上がり枕元のオンドリを「これあげるけえね」と銀作に手渡した。すると銀作も「これ、スミちゃんにあげるけえね」といつてしまったのだ。それから周囲の呆れ顔を見ているうちに、わけの分からない哀しさがこみ上げて来て泣き出すと、何とスミちゃんも泣き出したのだ。

晩秋の頃、駐在所の縁先でスミちゃんと美濃柿の熟したのを食べたことがあった。この柿は邑智郡の実家の裏庭に生った洪柿だった。熟すととても美味しい。大きな柿で、葉もまた非常に大きい。二人のうちどちらがいい出したのであろう。美濃柿を食べ終わると二人は種をどこかにまくことにした。駐在所の周囲にも、向こうの川岸にもまいた。銀作が「こんべえが種まきやからすがほじくる」といしながら、おどけて首すくめの権兵衛をやつてびよこたん、びよこたん歩いたら、スミちゃんは、大笑いしていたが心配になったのか種の上にたくさん土をかけた。

種まきのあと、しばらくして冬になった。それから春が訪れ、銀作は母親や妹と共に種村を去り、邑智郡の実家に戻った。巡査の父

親だけが出征まで種村に留まった。スミちゃんとは、その後一度も会っていない。スミちゃんを思い出すと、いつも切ない気持ちになった。

盆が近づいた頃、銀作はそうだ、今年こそは墓参を兼ねて種村にも立ち寄ってみようと思った。春の終わり頃から銀作の神経はふと安定感を失ってしまい、何かささらのように荒くれたようだった。銀作は奇妙な妄想や強迫観念に脅やかされることがあったのだ。ぜひのんびり旅行でもするようにと医者からも促されていたのだが、種村はすっかり変わっているのではないだろうか。自然が思いのままに蔓っているだけなら、茂みの底に昔の村の面影を探り当てることができないか。

でもいったいなぜあの種村が飯石郡にあると、銀作は思い込んでいたのだろう。ふと確かめてみる気になったからよかった。そうでなければ、とんでもない旅行をするところだった。なるほど飯石郡の掛合町には多根という地区がある。かつて出雲市で列車を下り、広島行きのバスに乗り掛合町に行ったことがあった。その折、掛合町に多根があることを知ったのだ。銀作はいつしか多根があつた種村だと思いがいをしていたのだ。多根は種村といわれたことがあると誰かが話してくれたことがあるように思うのだが。「多根地区は前の多根村ですけえね。もっと昔は種村いうとりました」ともかく種は根とちがう。自然の再生・循環する生命力、それは先ず種子なのだ。

銀作の父親の後静雄が益田市種村に昭和十七年一月八日から二十年五月六日まで三年間巡査として勤務した記録が松江市警察本部警務課にあった。そこ以外にはどこにもなかった。もちろん、掛合町警察署にも、多根駐在所にもなかった。

東京から八月十四日に銀作は益田市の種村公民館に電話をかけた。種村には今、役場は置かれていないのだ。台風十号が猛烈に荒れ狂う日だった。相当の年配らしい館長さんの声が種村から聞こえてきた。種村とつながった瞬間だった。「ああ、とつとつ」という思いに銀作は圧倒され、手足がはいれんを起こしたほどだった。「今、種村の人口はわずか四百人に減ったです。昔の四分の一です。寂れ果

ててがらんとした村ですけえ。昔の駐在所はまだ残つとるようです。前に、山崩れがあつて危うくつぶされかけましたが、あれは残ったげなけえ」。嬉しくなつて銀作が思わず、「よかった。よかった。」というと、「でも、少しは傾いとるようです。もうずっと前から人が住まん空き家になつてもうて、あすこでぼつんと立つとるげなけえ。種には駐在所は現在、置かれておらんのです」と館長さんがいった。つけ加えて、こんなこともいった。「あすこは、種村の外れの谷間にあつてほんに寂しい、おぞいところです。いげに種村のいち、がらんとしたとこでしようのう。旧道は通れませんが、まあ一つ行つてみんさいや」。

銀作はまだ色々聞いてみたかった。だが種村に行けば分かるだろう。すぐ旅立とうと銀作は気が急いた。台風が過去の方へ銀作を吹きさらつて行くかようだった。銀作のうちに、昔のあれこれがおそろしい勢いでわき立ち始めていた。太郎ちゃんと紙ヒコーキを空に飛ばしたと、川で釣つた魚とそのさわやかなにおいのこと、駐在所の濡れ縁のこと、スミちゃんと美濃柿の種をまいたことなど、ささいなことが一つひとつ限りなく哀切な色合いを帯びて甦つて来たのだった。

館長さんは小さな種村が「寂れ果ててがらんとした」村だと話してくれたのだが、それならばこの種村の周辺は静寂と沈黙によつてとり囲まれ、その内部もまた静寂と沈黙により浸透されているはずだった。ほんとに、ささらのように神経を苛だたせる都会の喧騒を今まで自分は何と激しく呪い、そこにやむなく生きる自分を嘆いてきたことだろうと、銀作はまた思った。都市では治療力のある、慈愛にみちた静寂であれ、暗黒的な、敵意のある、または冥界的な静寂であれ、およそ静寂という静寂が徹底的に追い払われ、砕かれ、ぼろぼろに引きちぎられていたのだった。ほんの僅かばかりの静寂と沈黙があちこちに散在するだけで、もはや静寂の占めるべき席はほとんど残されていないかのようだ。かつて沈黙と静寂があつた空間は、一つの事物の上に他の事物が重なり積み上げられて行つて、次ぎ次に占拠されてしまつたのだった。ちりをかぶつて黄色くしなびた街路樹の葉陰に、まるでちぎれた雑巾のようになってかくれ潜む

静寂は何とみじめな姿をさらしているのだろう。元来、健康な生命体に宿ってはたらいっているべき静寂は今や黙って病臥している病人のもとにのみ存在している。まどろみかねて寝台の上で何度も寝返りを打つ銀作のもとに、それが存在しているように。静寂はなんと病的なものに変わってしまったのだろう。

だが大自然の静寂が絶滅することなどありえないのであり、それはある日結託していつせいに蜂起する。都市のあらゆる物音を打ちのめし、人間の口から言葉を奪う荒れ狂う風、それが静寂の蜂起だ。今吹きまくっている台風十号がそれだ、と銀作は思った。物音や言葉以前に存在した静寂と沈黙とは豊かな産出力を孕む始原的現象、多様な種子を内蔵する広大な、がらんと空いた原野のことだった。台風十号に吹きさらわれたかのように種村へと旅立つ銀作は種村がこの広大な原野といつまでも、どこかでつながっていてくれるようにと願わないではいられなかった。それとつながっているからこそ種村なのだという気がしていた。種村が静寂から切り離されるとは、自然が循環・再生する静かなリズムであることを愚かな人間が忘れ果てること、今日、世界的規模のものとなった環境破壊の轍を種村もまた踏むことだったのだ。

これはとても列車の旅と言えるものではなかった。東京駅から新幹線で岡山まで、岡山から津山線で出雲市駅まで、さらに、そこから終点の益田市駅まで、たえず暗夜を吹きつける風にゆすられて銀作は、どうしようもない睡魔に襲われ、夜の不眠を取り返すかのようにならずとひっきりなしに窓際で奇妙な夢を見てうとうととまどろみ続けていた。出雲と益田の間はどこかで列車の中が空いたときがあった。盆の帰省者であればどあふれていた列車が急にこんなに空くことはないのだから、それも夢だったのか。銀作の耳にどこからか「いげに、女の赤ん坊ですけえ。前歯が二本生えておりましようがい」と女の声が聞こえた。「お休みのところを悪さをして、こらえちゃんさい」。そう言えば、眠っている銀作の顔を赤ん坊がぺたぺたたたたいたり、撫でたり何か話しかけたりしていたようだった。銀作も赤ん坊に夢うつつで話しかけていたのかも知れない。気がつくとも赤ん坊も女もいなかった。

銀作は益田市内の旅館で一泊した。翌朝十五日の九時頃駅前のバス停留所で種村行きバスを待った。辺りには何かすでにひんやりとした、秋の気配があった。今年は例年になく秋の訪れが早い年だった。

バスに乗った者は銀作のほかには誰一人いなかった。種村への盆の帰省者は誰もいなかったのか。窓際にすわって外を眺めたら「万葉の柿本人麻呂縁の益田市」などと書かれた大きな垂れ幕が風にひらひら吹かれているのが見えた。台風之余波がまだたしかに残っていた。多くの旅行者が人麻呂縁の名所を訪れるのだろう。銀作は、「不眠症の後銀作氏が全く無名の男、後銀作氏縁の寒村、がらんとした種村を秋風に吹かれて訪れるところであります」などとふざけた独り言をいっていた。

銀作ただ一人を乗せた空のバスは赤い石州がわらの家が散見される夕日丘団地、赤雁の里、赤石里、里村を過ぎて種村に着いた。「ここだったのか」と銀作は人の通らない道路に立って思った。思わずしゃがみこみ遠い過去の深みの底にころがっていた石ころを拾い上げじっと見つめた。彼のかげがえのない原風景を揺るぎ無く組み立ててくれていたはずの石ころを。辺りの木の葉には原風景の芳しいそよざらしきものがなかつただろうか。ぶらぶら歩いて行くと、朽ち果て、傾く廃屋ばかりが目に入り、種村は草木の底に沈もうとしていた。

山陰を訪れる者が感じる人情のあたたかさを、やはり銀作は今感じていた。「駐在所はあの向こうの平家岳のふもとの谷間にありますけえ、いっしょに行ってみんさるか」と種村公民館館長、野村寛さんはまことに親切で気さくだった。「その前に会いたい人とか、今どうしとるか知りたい人がどなたかありんさるかね」。銀作はうれしい気持ちになってなつかしい人たちの名前を何人かあげた。だが野村寛さんには、その名前のどれにも心当たりがなかった。

そのとき、野村寛さんの親せきの人や友人が折りよく公民館にやって来た。野村和夫さんと山田誠さんだ。公民館で三人が熱心に茶色になった村史や同窓会名簿をめくり電話をかけまくって調べてくれた。この村史でも新しいもので、古いものは紛失していたのだっ

た。いくらお盆の休みだとはいえ、この人たちほど真剣に人の話を自分のこととして聞いてくれる者はめったにいないものではないと銀作はまた思った。銀作がもういいですと何度いっても「後さんは種に戻ってきんさつた先祖ですけえ」といいながら彼らは調べるのをやめようとしなかった。三時間も四時間も調べてくれた。そのうち、駐在所にかつて後静雄巡査がいたこと、その息子がいたことを記憶している者もないことが分かって銀作はしみじみ、じつさい自分はずでにあの世の人間か浦島太郎のものだと思い始めた。

だが、ついにあのスミちゃんと太郎ちゃんとヤエちゃんのことを明かになったのだ。野村和夫さんは九十二歳のおばあさんの原田咲さんをふと思いだした。村に一軒ある古い店屋の咲さんは今でも達者で、まだ耳がよく聴こえる。「昔をかなり知ってるようですよ」という野村和夫さんからふるえる手で受話器を受け取り、銀作は咲さんと話を始めた。先ず、遠い昔の自分の自己紹介をやる、「あの駐在所のことは、私ははつきりとは知らんです。そんな駐在さんや坊やには、さあ気がつかんかったですね。原田に後妻で来る前のことですかいのう」と咲さんがいった。「スミちゃんなら知ってます。谷間の床屋の子ですけえ。じゃが床屋はずつと昔にのうなつてしもつて、あすこには薬局が建ちましたいのう。薬局が火事で燃えた後は草藪になつとります」。

「スミちゃんはどうなりました」と銀作が聞いたら咲さんは、「あの子は、子供のときにとくにのうなつとります」といった。「あの子の遠縁にあたる木下雪さんのところにもらわれて行った翌年にのうなつとりますのう。雪さんはわたしと仲がよかったです。雪さんも、とうにもはやのうなりましたのう。私は前には旧道沿いの林にあつた墓に行つては墓参りを致しましたけえ」。「スミちゃんは病気になるつたんですか」と銀作が聞くと咲さんは「こついつた。『あの子は、ここの沖田川と後谷川がまざるところで溺れとります。夏にこちらに遊びに戻つて、誰かを助けようと思つて自分だけ溺れました。雪さんが泣きましたいのう』。それから咲さんは「少しまつとりんさい」といつて電話を切つた。次の電話で「スミちゃんの戒名は蓮苑妙純童女ですけえ」といつた。



銀作はいいよつのない思いに押し流されそうになりながら、それでもヤエちゃんと太郎ちゃんのことをたずねた。咲さんは二人についても知っていた。ヤエちゃんも太郎ちゃんもすでにこの世の人ではなかった。銀作が心から咲さんにお礼を述べると、「えっそ役立たずですみません」と咲さんがいった。

公民館では誰もが、咲さんの長寿と記憶力に感謝し合った。野村さんたち三人は「へえ、あの草薙に薬局があつたり、床屋があつたりしたんか」と驚いた。そのとき銀作はどうしようもない空しさがまたもやこみ上げるのを感じ始めていた。自分を知っているものは誰一人いないのだ。知っていたものはすでにこの世にはいないのだ。自分を覚えていて跳びかかる一匹の犬さえもない。自分と過去を共にした生命あるものは、もはや何もかもが記憶の薄暗がりでしか生きていなかったのか。

野村寛さんが、さっき手渡してくれた十六日夜に行われる盆踊りの口説きの「コピー」を銀作はぼんやり手にとってめくった。「三太口説き」が載っている。三太は侍くずれの馬子で、色の道の哀れを朝夕歌って歩いていたが、代官の娘がこの馬子の歌に聞き惚れ、ついには馬子に恋い焦がれて死んだ。「三太口説き」ではその一部始終が止めど無く、ると物語られていたのだった。「先祖の供養にはそんな口説きがいつち薬になつとります。ここでは」と山田誠さんが傍で笑った。「吹き込んだのを聞いてみんさいや」といってテープを聞かせてくれた。

竹の節さよ、所で変わる

歌の節さよ、世が世で変わる

それにつけても口説きがござる

止めて止まらぬ、色の道

これを三太が歌とつて通る

姫が御墓は、秋風原よ

またも原をば、通りやるならば

歌とつてやりやれよ、御墓の前で

……

野村寛さんが平家岳の林に分け入る細いみちの手前のところまで

車で銀作を連れて来てくれた。林の中のみちが二股に分かれたなら、とにかく右のみちを進むように、うっかり左のみちに入って烏帽子山に迷い込まないように、と何度も注意してくれた。それから銀作に益田駅行きのバス停のあるところを教えておいて公民館へ戻って行った。別れ際に「えっそ役立たずですみません」と咲さんのようにわび、何度も「また種にきんさいや」といった。

平家岳を右に右にと折れながら歩いて行くとふいに樹間の向こうに眺めが開け、気がつくると銀作の足元には険しい崖が切断されていた。どこからかぶつぶつ呟くような水音が聞こえてくる。崖下から谷間がずっと向こうに広がり、谷間の原っぱには秋の薄い、黄色い陽が淀んでいた。銀作自身の薄暗い心の深みの底へ、心の原風景の谷底へ、と銀作は平家岳を一步一步下って行った。

谷底へ下りると、原っぱの方へと、薄を両手でかき分けてどんどん歩いて行った。原っぱの片隅には、小さな祠が祀られていたり、お地藏さんが釣鐘状の花をつけた桔梗の傍らにひっそり佇んでいた。見ると、原っぱには、いやむしろ谷間のいたるところに古い墓がひとかたまりになって苔生し、土に半分埋没しかけていた。夥しい死が谷間のすみずみに織り込められてあったのだ。旧道沿いの林のどこかにあるスミちゃんの墓のことを思い出し、咲さんに墓の在り処を聞いておかなかつたのが悔やまれた。スミちゃんの墓も土に半分沈んでいるのだろうか。もはや、すっかり土の底に消え失せたのだろうか。何という寂しさだろう。それに薄野がこれほど広がっているとは思わなかつた。墓場の沈黙の原っぱで凋落の秋の死の花々が薄暗い景色の中で白々とこんなにかげんに咲き誇っていたとは。これらの花々は可視的となつた白い静寂だった。思わず惑乱し、目が暗み心地よい死の国へ誘われて行きそうだった。だが、この花々には芽生えを待つ生命も眠っている。静寂は豊かな産出力を孕むのだから……。薄の白い花穂にはみごとに種子が包蔵されているのであり、それを死の花だなどといいかげんに呼んではなるまい。薄がどれほど生活に役立ってきたかを忘れてはなるまい。炭を焼いた頃は、それを炭俵に編んだし、かつては茅ぶき屋根にふいたりしたものだ。薄はすすく立草を意味する由緒ある植物だ。

と、そのとき陽が射したわけでもないのに、とつぜん周囲が妙に  
しいんと明瞭になり、どこからか赤ん坊の泣き声が聞こえたような  
気がした。ここが薄の中であることは分かるのだが何か景色が一変  
した印象だった。じつと耳をすませていると、今度ははつきりと元  
気のいい赤ん坊の泣き声だったので、うれしくなって、そちらへ近  
寄って行った。向こう向きにしゃがんで何かしている女の背に、赤  
い頬つぺのむずかる赤ん坊が負んぶされているのが見えた。あの女  
だった。列車の中で出会ったあの女が太腿も露に、丸いたらいに置  
いた洗濯板に衣類を「ごしごしこすりつけて汚れを落としている。た  
らいの傍らには古い墓石が転がっている。「やっぱし(じつ)としと  
らんかい」と言いながら背中の中を赤ん坊をゆすってふり返った女が銀  
作を見付け「いげに、戻りんさるんがおそいけえ」と不平をこぼし、  
赤ん坊をすぐさま銀作に抱かせた。「そいじゃあ、しっかり子守り  
をしとつちゃんさいね」といって忙しげに薄の中に消えて行った。  
「仏教婦人会の寄り合いに行くんかあ」と背後からどなったのだが聞  
こえたかどうか。この時、銀作は女が自分の女房であることをこれ  
ぼつちも疑っていなかったし、子守りはむろん命がけでする気だっ  
た。だが、たて続けにくしゃみやみが出て、はっとしてわれに返った銀  
作はざわめく薄の中で自分の両手がただ風を抱いていることに気付  
いたのだった。

昔の駐在所がどこにあるのか聞くために、銀作は人の住まってい  
そうな民家を何軒か訪れた。だが、いずれも空き家だった。障子の  
破れ目から覗くと蛇の長い抜け殻が部屋の真中に長々と横たわって  
いる民家もあった。風にざわざわ鳴る薄の中をまた泳ぐように渡っ  
て、人の住まっていそうな方へ向かった。薄を吹き分け走る風が蛇  
の這うのに似ている、と銀作には思われた。あの太たい蛇が空き  
家で殻を抜いで甦ったように、この風の蛇も脱皮するのだろうか。  
追いかけてこをする子供になった気で、どこまでも風の蛇の後を走  
っていくと、それは夾竹桃の低い緑の茂みに這い込んだ。思った  
ら、もうずっと向こうの杉林の角を曲がってたちまち見えなくなっ  
た。

茅ぶきのあばら家の前で、柿の木にもたれかかって一服していた

男が教えてくれた方に歩いていった。すると原っぱの向こうに壁の剥げ落ちた、白い屋根瓦の駐在所が雑木林に囲まれてぼつんとあった。石州瓦には赤、水色、銀黒などの種類があるが、風雪に苛まれ、傷み、欠損した、駐在所の瓦は、よく見れば銀黒だったのだ。これはい度も思い出さなかったことだった。だが眺めれば眺めるほど、沈んだ色調の銀黒の瓦だけがこの駐在所にふさわしく銀黒の駐在所だけが銀作の記憶の底にあるものだったのだ。深い既知感が銀作を包み込んだ。銀作はこの小屋のような小さい建物が自分に語りかけるのを感じ始めていた。親馬鹿だった巡査の父親が、なつかしい友だちが、かつて銀作と共に過去を生きた者たちが今も生きていて銀作を迎えてくれているかのような気分になつていった。

銀作は夢を見ている思ひだった。たしかに彼には、夢の中でここを何度も訪れていた印象があるのだ。銀作はふだんからよく夢を見、よく覚えていた男だったのだから。まどろみかねる、慢性的な浅い眠りのせいでもあったのだろうが、銀作には、眠りの中で夢見つつある時、眠りから直ちに目を覚まし、夢幻の状態を記憶の領域に持つてくるのが、しばしば可能になつていたのである。要するに、マレー半島のセマイ族ほどではなかったにせよ、銀作は夢を見ながらも、今、自分が夢を見ていると自覚していたのだ。この自覚が強くなれば目覚めてしまうが、自覚が弱いならば夢見るといふ微妙な心理の力学に、いつしかかなり精通していて、注意深い、巧妙な心理の操作により、自覚しつつも、夢を見続けることができたのだ。

銀作の眼前の駐在所が夢に過ぎないはかなさでぐらりと揺らぎ傾いた。この瞬間、銀作は自分が駐在所を注視し続けて、自覚が生じ夢を破碎しかけたのではないかという気がふとしていた。目覚めると騒々しい大都会の寒々とした家の寢床に独身男が一人、またも阿呆のように横たわっているだけではないかという、わびしい思いがちらと脳裏をかすめてもいたのだ。銀作の意識にやがて現実感覚が戻ってきたのであるが、もしかしたら、今自分が夢を見ているのではないかという気分を、それが閉め出すことはなかなか困難だった。そして今、銀作はこの気分を閉め出してもいいのだと、いや

閉め出さなければならぬと思っていたのである。

赤まんまやほたる草や撫子などが咲き乱れている原っぱの中に点々と消え残る野路を何とかさがし当て、鳶もみじの葉で蔽われた駐在所に近づいた銀作は、駐在所と雑木林との間に思ったよりは空間が開けていたのを見て驚いた。どこかに川があったはずだが、と見回すと、向こうの山際に沿って流れが一筋あるらしかった。川の流れは後谷川か沖田川のいずれかに注ぎ込んでいるはずだった。

荒屋の駐在所に着くと、あちこち剥げ落ちた壁を手で触りながら一周した。すると、懐かしさ、愛おしさのあまり、こんなにも壁を凝視し、手で強く触れるなら、たちまち壁が止めど無く剥げ落ち続け、ついには、駐在所が瓦礫の山と化してしまいうさだという抗し難い不安感に突然囚われていた。気を静め幻想の老朽した壁をあえてどんと叩きわれに返ったのだった。

壁を一周しながらも銀作は何かを見つけようとして辺りを見渡していなかったか。銀作は枯死した木らしきものを探していたのであった。公民館で銀作が山田誠さんと盆踊りの口説きの話をしていたときだった。となりでは野村寛さんたちが駐在所の周辺の話をやっており、その話の中で二人のうちのどちらかが「最近枯れたあの木」だとか、「あの実は」とかいつていたのを銀作はふと耳にしていた。このとき銀作はその「枯れた木」について尋ねようとしたのだが、やめていたのだった。おそろしかったのだ。それが何の木かを、その時はつきりさせるのが。それに駐在所にやってきたなら、分かることだったのだから。

雑木林の少し脇を歩くと、変形し、歪んだ印象を与える風景がふいに開けた。これこそ夢の風景というものだった。だが、そこには野村寛さんがいつていた、あの大事件、駐在所の背後からとつぜん何もかもを薙ぎ倒して行った山崩れの跡がまだ生々しく残っているのだった。たしかに現実のものであるに違いない、たつた今、地中から引き抜かれたかのようにわななき、戦くカシの根、倒れた大木のヤマモミジの幹に空いたうろ(空洞)。そのうろにせわしく出入りしている蟻の群れ。なるほど、山崩れは駐在所を危く押しつぶすところだったのだ。山崩れが掠めて過ぎたときに駐在所は少し傾いて

しまったのだ。

山と駐在所の間には、今はかなり広やかな空間があった。再び山崩れがあったにせよ、もう心配する必要はなさそうだった。林の葉陰で思い出したように風が起こり、梢を鳴らして空へ抜けた。木の間から微かに、ほんとに幽かに漏れ入る秋の夕日が銀作の心の底で明滅した。

やっぱりそうだったのだ、「枯れた木」とは柿の木のことだったのだと独り言をいいながら銀作は歪んだ風景の中に白骨のように白々と横たわる、大往生を遂げた一本の木に触り、何度も撫でた。銀作にはこの木がああ美濃柿の木だと思えてしかたがなかった。銀作は駐在所のほうへ戻った。本能に導かれるかのようにそちらへ近づいていった。

すると、どうだろう。銀作の頭上の小暗い葉陰にきれいな青い柿の実のいくつかが美しいと垂れ下がっているではないか。周囲の雑木林よりも決して高くはない柿の木が何本か生えていて、どの木にもみごとな実がついている。黄ばんで、すでに稔りの秋を約束している実もいくつもあった。

銀作は目を奪われていた。ここにある柿の実は、みんな銀作がよく知っている美濃柿だった。どんな柿の実よりも実の肌がなめらかで艶のある、熟すと非常に美味しいかおり豊かな渋柿。どんな柿よりも大きい実と葉。へたさえもびっくりするほど大きい。あの枯れ木の子孫がこここの美濃柿だと銀作は思った。

なおも銀作は凝視し続けていた。山崩れがあったとき、先祖の木は子孫の木と離れ離れにされて向こうへ運ばれて行ったのだ。向こうへ運ばれてから、それは枯れ木になってしまったのか、ここですでに枯れ木だったのか、どちらであろう。

いずれにせよ枯れ木が実を盛んに生らせていた頃、梢から熟した実が落ち、芽を出し、生長したのだ。梢でトリが実をついばんだとき、実と種子を落としたのだろう。

銀作はまだ美濃柿をじっと見詰めていた。どんなに凝視しても、ぐらりと視界が揺れたりすることはなく、どの柿もしいんと垂れ下がったままだった。銀作は今たしかに自分が夢の中を漂ってはいな

いと、疑いようのない現実の中にと、分っていた。それに、もしもこれが夢だとするなら、種村の静寂から奇跡のように産み落とされた、ことは言い表せない驚異の果実をこのように目の当りにしながら、どうして銀作の夢が感動のあまり直ちに破砕しなかつたのであろう。

銀作は向こうの枯れ木の方へ、先祖の白骨のある所へ行つて欠片（かけら）を一つつかんで戻り子孫の美濃柿の根元に置いた。今日はお盆なのだから。それから銀作は枯れ木に掛かつて赤々と残光のように輝いた、晩秋の最後の実の一つを、スミちゃんとまいた美濃柿の最後を想像した。

美濃柿の実をもう一度頭上に眺めた銀作は、過去を自分と共有したスミちゃんが今も生命ある存在として自分を迎えてくれたのだという、ありありとした思いにまたも襲われていた。銀作は浦島太郎ではなかつたのだ。銀作もスミちゃんも循環・再生する生命力、甦る春だつたのだ。今や銀作は、種村という場の感覚の切実な体験者、種村の原風景の再現者だつたのであり、種村の誰にも負けない、過去の市民権の資格ある存在だつた。

この人里離れた寂しい静かな谷間で余生を過ごすとしたらどうだろうと、銀作はふと思つた。やがて本当にそうしてみたい気になつた。文句をいう者などいないように銀作には思われた。野村寛さんたちも種村に人が減つた昨今だからよろこんで「どうぞ、どうぞ」というにきまつている。本当にそうしたらどうだろうとまた思つた。ますます蔓る自然の底に深々と埋没し喧騒の人の世をさらりと忘れ、傾く小屋に住んで柿本人稀としての余生を過ごすいいこく者、うん、悪くないなと呟いていた。

駐在所の前に広がる、草花の咲き乱れた原っぱに坐つて銀作は、何気なく傍らの桃色の撫子に目を留め、見入っていた。そのうち、山陰地方に甦り消え残る古い忘れられた日本の薄くはかない美しさ、それが、谷間のこの撫子だという気がした。すると、どこからか、秋風の幼い日へ再び誘うスミちゃんの声が聞こえてきた。「トリと人形とどっちを作ってほしいね」「トリ」と銀作がいうと、スミちゃんは真面目な顔をして一所けんめいに繊細な撫子のオンドリをま

た作り始めた。

…再生をやめぬ紅い不死のトリが誕生しようとしていたのだった。

## 秋風の村(あらすじ)

主人公の銀作が幼年時代を過ごした土地を再訪し、自然の中にひたると、次第に彼の精神の再生が生じ始めていた。そんなことを象徴的に語ったのが「秋風の村」である。

盆が近づいた頃、銀作は半世紀以上訪れたことのない山陰地方の寒村に、幼い日、同い年の女の子のスミちゃんと撫子のトリを作ったり、柿の種をまいたりした懐かしい種村に、墓参を兼ねて立ち寄ることにした。春の終わり頃から、ふと神経の安定を失った銀作は、医者からのんびりと旅行でもするようになると言われてもいたのだった。

出発前に確かめたからよかった。銀作は飯石郡の掛合町にある多根村を、これから訪れる益田市の種村とかんちがいていたのだった。種村に電話をすると公民館の館長さんが、寂れ果てがらんとした今の種村の姿を伝えてくれた。銀作はそれなら自然の静寂が種村を支配しているはずだと、むしろほっとするのだった。銀作には静寂とは産出力を孕む始原的現象のことだったのだから。列車の旅



の翌日、バスで種村公民館を訪れた。館長さんたちが、さかんに電話をかけたり、名簿をめくったりして調べてくれたのだが、人口わずか四百人に減少した種村には、駐在所で巡査の父親と過ごした昔の銀作のことを知っている者など一人も見つからないのだった。分ったことと言えば、スミちゃんが幼い日に死んでいたことだけだった。

種村の外れにある空き家の小さな駐在所に行くために銀作が平家岳の谷底に下りると、そこには、いたる所に墓石が転がる白い薄の原っぱが、白い静寂がどこまでも広がっていた。銀作は激しい寂寥感に襲われながらも、この原っぱの静寂に自然の産出力を、循環と再生を、生命力を夢想していたのだった。

荒屋の駐在所は寂しい谷間にぽつんとあった。銀作が駐在所を眺めていると、夢のはかなさで、それがぐらりと傾いた。銀作は慢性的な浅い眠りに由来する、夢とも現とも定かでない気分で駐在所を眺めていたのだから。銀作は神経の安定を失った男だったのだから。

駐在所の周りの林の中に入った銀作は、そこで柿の木が青い実をつけて立っているのに気づいた。よくみるとそれは美濃柿であり、昔、銀作はスミちゃんと、その種をここにまいたはずだった。頭上の美濃柿はどんなに凝視しても、しんと垂れ下がったままだった。ぐらりと視界が揺れたりすることはなく、銀作は疑いようのない現実の中にいると、これは夢でないと思っていた。甦ったスミちゃんが自分を迎えてくれたのだと思った。スミちゃんは、いや銀作も循環・再生する生命力、甦る春だったのだ。

ふと、銀作は種村の自然の底に深々と埋没して余生を過ごしてみたいと思った。種村の循環・再生する自然の一部と化したい気分になっていた。このような気分支配されていた銀作は、秋風の幼い日へまたも彼を誘うスミちゃんの声を聞いたのだった。撫子のトリを作るスミちゃんの手元をいつまでも見詰めていたのだった。